

無駄安留記に記述されている岩井郡の項目をすべて調査するにはあまりに十ヶ月は短すぎた。昨年度はまだ「こだわり」をもつて調査した項目があったような気がするが、今年度はそれが難しかった。理由は、調査地域が大学から遠くなつていくと、なかなか繰り返し実地調査に行くことができなかったことにつきるように思う。今回の調査を通じて、多少ともこの「こだわり」を持ちえたのは、関連文献が多い項目か、あるいは市内での調査が可能な項目を担当した学生だったことが何よりこのことを証明している。

だが、そうした限られた時間と少ない実地調査のなかでも得がたい成果がいくつかあった。とくに、今年度調査の最大の目玉は、船を借り切って海上から浦富海岸を調査できたことであろう。通常では見ることができない、さまざまな海岸の姿をこの目に焼き付けたことが大きな収穫であった。そこで、最後にちよつとこの浦富海岸の美しさという点にこだわって感想を述べてみたい。

今振り返ってみて、ふと気になったのは、現在の海岸の美しさは「昔も今も変わらぬ姿」なのだろうかということである。だとすると、鳥取の名所を改めて発見した？ということになるのだが、私たちのまえに広がっていた風景は、ほんとうに「昔のまま」の姿をとどめたものなのだろうか。

もちろん、数百年の地殻変動や海岸の浸食などによる変化もあるだろうが、私が想定しているのはこのことだけではない。確かに、『稲場民

談記』と『因幡志』の時代、そして無駄安留記の著者が見た海岸の姿、そしてその美しさを名所として確定した大正十五年国府屋東による『浦富海巖勝区八景詠』など、それぞれの時代をこえた普遍的な美しさがあるのかもしれない。しかし、哀しいかな、時間による変化を追う職業柄、そうした変わらぬものよりも変化することにこだわってしまう。この海岸に関しては、明らかに名所の指定と「観光」というのが大きな画期となるだろう。それ以前のものとはやはり区別して考えざるを得ない。つまり、風景を見る側の立場が大きく変わっていくからである。それだけではない。さらに風景に向かう感性が、その時代のさまざまな要因で大きく異なるものもあるのではないだろうか。今回の調査報告書のなかには、こうした時代の変化に注目したものもあった。

そのように考えたとしても、無駄安留記の描写する世界は、私のような単純な風景論で語りつくせぬものである。二年目を迎えた無駄安留記隊の活動のなかで、無駄安留記の魅力はさらに増してきている。願わくば、その面白さが皆に伝わらんことを。

(地域文化学科教員 岸本寛)

## 2006 年度 無駄安留記隊 隊員

岡村 由季子 (おかむら ゆきこ)	鳥取大学地域学部地域文化学科二回生
尾崎 淳 (おさき じゅん)	〃
川添 祐紀 (かわぞえ ゆうき)	〃
岸田 祐子 (きしだ ゆうこ)	〃
岸本 美花 (きしもと みか)	〃
玉木 一成 (たまき かずしげ)	〃
八田 麻未 (はった あさみ)	〃
山根 優子 (やまね ゆうこ)	地域文化学科内地留学生
茨木 透 (いばらき とおる)	鳥取大学地域学部地域文化学科教員
岸本 覚 (きしもと さとる)	〃
田中 仁 (たなか ひとし)	〃

## 無駄安留記隊報告書 2006

鳥取大学地域学部地域文化学科 2006 年度地域文化調査

2007 年 3 月 31 日 発行 (非売品)

編者 田中 仁  
茨木 透  
岸本 覚



発行所 鳥取大学地域学部地域文化学科  
〒680-0945 鳥取市湖山町南 4-101  
<http://www.fed.tottori-u.ac.jp/~ibaraki/mudaaruki/>

